

意見交換場面における日本語非母語話者による 意見陳述の様相

—学習・使用歴および使用環境に着目して—

小松 奈々

要 旨

本稿では、日本語母語話者との意見交換場面における日本語非母語話者の意見陳述には、学習・使用歴および使用環境の違いによりどのような差異が見られるかを発話構造および発話機能の観点から分析した。その結果、学習・使用歴が長く日本の大学や大学院に所属する非母語話者は、発話構造に関しては、先行研究で指摘されていた複雑な理由づけを伴いまとまった分量の意見を述べるという傾向は見られず、意見陳述を簡潔に述べているという傾向が見られた。発話機能に関しては、主張を述べる前に問題の背景説明を行ったり主張を厳密にするための但し書きを述べる、主張を述べた後にその内容を明確化したり補足意見を加えたりするなどの特徴が明らかになった。

以上の結果から、学習・使用歴が長くアカデミックな環境に身を置く非母語話者には、意見交換というコンテキストを理解した上で会話相手との発話バランスを考慮し、その中で効果的に意見を述べるという能力があることが示唆された。

【キーワード】 意見交換場面、学習・使用歴、意見陳述、発話構造、発話機能

1. 問題の所在と先行研究

一般的に「上級の壁」と言われるように、身の回りや生活に関する日常会話ができるようになった後で会話力をどのように伸ばしていくかということは、学習者にとって、またそれを指導する教師にとって一つの課題である。言語運用能力の指標である『ACTFL 言語運用能力基準』(バック 1989)では、中級から上級、超級へとレベルが上がるにつれて具体的な話題だけではなく抽象的課題についても扱えるという基準が示されている。つまり、上級へのステップアップには社会問題など自分の身近ではない話題を扱う場面で問題なく自分の意見を述べられるかどうかが一鍵と言えよう。

学習者のレベル別の意見陳述を分析した研究では、荻原ほか(2001)、鈴木(2006)が挙げられる。荻原ほか(2001)では、OPI¹の判定による超級および上級上では具体的な質問だけでなく社会問題など抽象的な話題にも複段落を用いて詳しく話されること、複数の視点から意見を述べたり主張に対する複数の裏付けをしたりすることで説得力のある意見が述べられることが明らかにされている。また、鈴木(2006)では、超級と上級で表れる意見陳述の差異について、発話構造と発話機能という2つの視点からの分析が試みられてい

る。その結果として、超級話者による意見陳述の方が1つの考えを中心に結束した構造をもつ傾向にあること、さらに、意見に対する理由、裏付けという行為の中でも、特に複数の理由、裏付けを述べてその意見の正当性を訴えるような比較的複雑な意見陳述が超級話者として高く評価される傾向があることが明らかにされている。

荻原ほか(2001)、鈴木(2006)の研究結果は、学習者が目標とするべき超級話者がまだその段階に至っていない学習者と比べどのような意見陳述の能力を持っているかを示したという点で意義のある研究であると言える。しかしその結果はインタビュー場面というコンテキストに影響を受けていると思われる。荻原ほか(2001)は、超級話者の発話に母語話者より複雑で論理的であるという特徴が見られたことについて「超級話者は、(OPIを)外国語学習者としてその学習の成果を示す場として捉え、持てる力を精いっぱい発揮しようとする。そのために(中略)意見を尋ねられた場合には、さまざまな裏付けのある論理的な意見を複段落で展開していく(2001: p.101)」という点を指摘している。OPIに限らず、母語話者がインタビューアとなるインタビュー場面は学習者にとって会話試験の意味合いが強くなり、そこでの発話は日常に起こりうる会話場

面でのパフォーマンスから乖離する可能性がある。さらに、これらの先行研究で設定されている「超級」や「上級」などのレベルは、あくまでインタビューでの応答を測定する OPI における判定レベルであり、話し手が頻繁に交替する意見交換場面での日本語運用力とは異なる。実際には、そのような場面での日本語能力をレベル付けすることは難しい。

そこで本研究では、まず、分析場面として日本語非母語話者が日常的に遭遇するであろう日本語母語話者との意見交換場面を選択した。そして、分析対象者としてこのような場面に慣れている話者を想定し、日本語の学習および使用歴が長く、大学や大学院など、アカデミックな環境に身を置いているという 2 つの条件を設定し、条件に当てはまる話者とそうでない話者による意見陳述の差異について明らかにしたいと考えた。

2. 研究課題

本研究の目的は、日本語母語話者(以下 NS)との意見交換場面において、日本語非母語話者(以下 NNS)がどのような意見陳述をしているのかを、構造および機能の観点から探ることである。そこで研究課題として以下の 2 つを設定した。

NS との意見交換において、①NNS による意見陳述の構造には NNS の日本語学習・使用歴および使用環境によって差異があるか。②NNS による意見陳述に表れる発話機能には NNS の日本語学習・使用歴および使用環境によって差異があるか。

3. 調査の概要

3.1 データ

まず、NS と韓国語を母語とする NNS の接触場面会話を収集した。両者とも 20 代女性である。性別および学習者の母語を統一したのは、性差および母語の影響を排除するためである。また、両者を初対面に設定し、親密度を統制した。15 分間の自由会話によりお互いに対する緊張を解いてもらった後、参加者双方の協議の上テーマを決めてもらい、意見交換の会話を 15 分間録音した。

意見交換の会話テーマは、20 代女性が関心を持つと思われるテーマを想定し、①大学では学問そのものが重視されるべきか、就職の準備教育が重視されるべきか、②女子大学は必要か、③企業で女子社員を一定数雇用する制度に賛成か、④子供の教育方

法として、1 つのものを集中的に伸ばすことと広く色々な経験をさせることとどちらが大事か、⑤国際結婚に賛成か、⑥少年犯罪の原因は家庭にあるという意見に同意するか、という 6 種類を準備した。

3.2 調査対象者

次に、収集したデータの中から、NNS の学習歴および使用歴、そして使用環境に条件をつけ、2 つのグループを設定した。学習歴は日本語クラスを受講するなどして日本語学習に関わっている期間、使用歴は特別に学習してはいないが積極的に日本語を使用している期間を指す。どちらも滞日歴とは無関係である。学習と使用では独学など区別が曖昧な部分があるため、本研究では両者の合計期間を学習・使用歴と呼び、一つの条件とした。具体的には、学習・使用歴が 5 年以上で日本の大学および大学院に正規学生として所属するグループと、1 年から 3 年までで日本の大学に正規学生として所属していないグループである。本研究では便宜的に、学習・使用歴が長いグループを A 群、短いグループを B 群と呼ぶ。対象者全体および各群の概要を表 1 に示す。

表 1 対象者の概要

	A 群	B 群
人数	14 名 (A1~A14)	14 名 (B1~B14)
学習・ 使用歴条件	5 年以上	1 年以上 3 年以下
平均 学習・使用歴	7.32 年	1.82 年
使用環境 条件	日本の大学 (学部・大学院)	交換留学・ワーキングホリデー等
平均年齢	25.8 歳	24 歳

グループ分けの指標として、A 群の学習・使用歴を 5 年以上としたのは、大学在籍期間の他に大学入学を目的とした語学学習を一定期間積んでいることが確実な日本語能力に反映すると判断したためである。また、日本の大学で学ぶ学部生および大学院生であることを条件としたのは、日常的に日本語母語話者との接触が多く会話全般に慣れており、授業においても母語話者と対等な立場でディスカッションをする機会が多く、意見交換会話の経験値が高いと判断したためである。

4. 分析方法

4.1 意見陳述の定義

本研究では、NNS の発話した意見陳述を分析対象とする。鈴木(2006)では、意見を述べる談話をアーギュメントと呼び、「時に理由づけを伴う、話し手あるいは書き手の意見、考え方を述べた一連のディスコース」と定義している。アーギュメントに関しては、現在までに、相手を説得しようとして行う理由づけの過程であると考えられる(Warnick & Inch 1989)一方で、他者に情報を与えたり、ある論点について可能性を探ったりする目的の意見や考えの提示も定義の範疇に含めるべきだという主張もある(Lunsford & Ruszkiewicz 2001)。鈴木(2006)では、日本には西洋的な論理が存在しない(Morrison 1972)、また、日本人は論理に価値を置かない(水谷 1987)という知見を考慮し、アーギュメントは必ずしも理由づけを伴わないという立場に立っている。本研究でも鈴木(2006)と同様の立場をとる。また、本研究で扱う発話は NNS 一人が述べたものであり「話者同士による議論」という意味との混同を避けるため、「アーギュメント」を「意見陳述」と呼ぶこととする。

4.2 分析手順

まず、録音された意見交換会話を文字化した。文字化資料中、NNS がターン²を取って話している箇所のうち、連続して意見、考えを述べていると判断される部分を意見陳述として抽出した。

次に、発話構造を量的に検討するため、意見陳述を適切な長さのユニットに分割した。分析の単位は鈴木(2004)で用いられた「一まとまりの思考(thought turns)」を基本にし、さらに区分を明確にするため鈴木(2004)の定義に加え「ひとつの内容(考えや情報)を表す述語句または述語文」と定義した。各群で抽出された意見陳述数および分割されたユニット数は表 2 の通りである。

表 2 有効データ数の内訳

	意見陳述数	ユニット数
A 群	80	320
B 群	61	350

ユニットへの分割後、鈴木(2006)で用いられた発話機能(表 3)を参考に、各ユニットを発話機能ごとに分類した。鈴木(2006)では、意見陳述内のユニット同士がどのような関係にあるかを、「階層的機能」で表している。「3. 垂直方向の指示」とは、ユニット A と B の間に「A、だから B」という関係が存在する場合に相当し、A は B を論理的に導くための必要条件となる。また、「2. 水平方向の継続」とは、理由づけを伴わずユニット A と B の関係が「A、そして B」という関係で意見陳述が続く場合を指す。階層的機能の下位分類である関係的機能は、鈴木(2006)で用いられた発話機能に 4 箇所の修正を加えたもの(表 4)を用いた。まず 1 点目として、鈴木(2006)では「3.2 因果関係」「3.3 類推」「3.4 反対意見の不承認」の使用がまれであり分析の時点で 5 種の垂直方向の支持はまとめて一つの機能として扱われていたため、本研究においては分類の段階から「理由」機能として一本化した。2 点目として、鈴木(2006)では、新たな情報や考えを追加する機能として「2.3 付加」が定義されているが、その範囲は広範に渡るため、本研究のデータでは、中心となる意見に新たな考えを追加する機能のみを「2.3 補足意見」機能とした。3 点目として、鈴木(2006)では「4. 無関係」「5. 会話維持」がそれぞれ階層的機能に分類されているが、両項目ともアーギュメントの構造に影響を与えない点で共通しているため「4. ユニット間無関連」としてまとめた。4 点目として、「4. ユニット間無関連」の下位項目として、「4.1 無関係」「4.2 その他」を設定し、「その他」には会話維持のための発話のほか、言いかげなどの不完全なコメントも含めた。各発話機能の定義および発話例は稿末の資料を参照されたい。

ユニットへの分割および発話機能への分類の信頼性については、意見陳述総数の 20%を無作為に選び、筆者および協力者 2 名が別々に区分したものを対照したところ、一致率はそれぞれ 80.95%、77.45%であった。一致しなかったものは再度検討し、最終的に 3 名の合意により全て分割、分類された。

表 3 鈴木(2006)で用いられた発話機能

階層的機能	関係的機能
1. 中心	
2. 水平方向の継続	2.1 明確化
	2.2 言い換え/反復
	2.3 付加
	2.4 状況説明
	2.5 修正
3. 垂直方向の支持	3.1 例示
	3.2 因果関係
	3.3 類推
	3.4 反対意見の不承認
	3.5 擬似論理
4. 無関係	
5. 会話維持	

以上の手順により分割および分類された意見陳述例を示す。次の例は、意見陳述が5つのユニットに区分され、それぞれ階層的機能、関係的機能に分類されている。

<意見陳述のユニット分割と発話機能のコーディング例>
(数字はユニット出現順)

意見陳述	階層的機能	関係的機能
A4:1 あのと私は塾とか何でもすんなり受け入れる方だったんですけど	水平	状況説明
2 でも小学校5年生で出会った英語の教室は結構インパクトがあって	水平	状況説明
3 えっと語学ってこんなに楽しいんだっていうのを知って	水平	状況説明
4 ですからやっぱりいろいろ経験：するっていうことは大事な：と思いますね：	中心	
5 何でも万能になろうってわけではなく：あこれは私には合わないんだとかもわかる機会になりますし：	垂直	理由

課題1では、意見陳述の構造について検討する。ここでは意見陳述の階層的機能に注目する。鈴木(2006)の構造分析では、超級話者は上級話者と比較してまとまった構造を持ち、複雑な理由づけを用い

表 4 本研究で用いた発話機能

階層的機能	関係的機能
1. 中心	
2. 水平方向の継続	2.1 明確化
	2.2 言い換え/反復
	2.3 補足意見
	2.4 状況説明
	2.5 修正
3. 垂直方向の支持	3.1 理由
4. ユニット間無関連	4.1 無関係
	4.2 その他

たアーギュメントを展開しているという仮説のもと、ユニット数2以下のアーギュメント、ユニット数3以上で「3.垂直方向の支持」の機能を持つユニットを含むアーギュメント、ユニット数3以上で「3.垂直方向の支持」を含まないアーギュメントの3種の出現比率を両群で比較した。本研究でも鈴木(2006)の分析同様、以上の3種の出現比率をA群、B群で比較し、両群の意見陳述の構造上の差異を明らかにする。課題2では、意見陳述の機能について検討する。ここではユニット間の関係的機能に注目する。課題1で分類した3種の意見構造パターンごとに各発話機能の出現位置および出現比率から各群の意見陳述の特徴を明らかにする。

5. 結果

5.1 発話構造

本研究では、意見陳述を「ユニット数2以下から成るもの＝まとまった構造を持たない意見陳述」「ユニット数3以上から成り垂直方向の支持を含むもの＝まとまった構造を持ち理由づけを含む意見陳述」「ユニット数3以上から成り垂直方向の支持を含まないもの＝まとまった構造を持ち理由づけを含まない意見陳述」の3種類に分類した。課題1では、以上3種類のパターン別出現頻度をA群、B群で比較した。対象者群(A群・B群)を独立変数とし、3種類の構造パターンを従属変数として、カイ2乗検定を行ったところ、各構造の出現頻度と対象者の各群に

有意な関係は認められなかった($\chi^2=4.45$, $df=2$, n.s.)。

また、一つの意見陳述に使用されたユニット数はA群の平均が4.01、B群の平均が5.74であり、t検定により両群の平均値には有意差が認められた($t(139)=2.54$ $p<.05$)。

このことから、A群の学習者はB群より複雑な論理構造を持った意見を展開するという特徴はなく、むしろ短い意見陳述を用いるという特徴があることが明らかになった。

5.2 発話機能

5.2.1 まとまった構造を持たない意見陳述

課題2では、5-1で用いた構造パターン別に、具体的にどのような発話機能が用いられ、どのように意見陳述が展開されるのかをA群、B群で比較した。

まず、2つのユニット以下から成る意見陳述の特徴について分析した。「中心」機能は全ての意見陳述に必ず含まれるため、分析から外した。「中心」を除く発話機能数はA群で17ユニット、B群で5ユニット見られた。A群は全17例中「理由」および「修正」機能が計10例見られ、全体の6割近くを占めている(図1)。

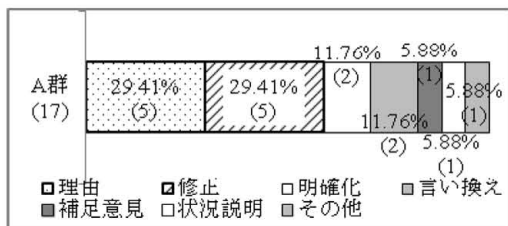


図1 意見陳述の構造別出現頻度

これは、「理由」+「中心」、および「修正」+「中心」で構成される意見陳述の割合が高いということを示している。一方、B群では「理由」「明確化」「補足意見」「修正」「状況説明」機能が各1例ずつ用いられており、特定の傾向は見られなかった。

5.2.2 理由付けのある意見陳述

次に、3つのユニット以上で構成され「理由」機能を含む意見陳述について分析した。意見陳述はその核となる主張である「中心」機能を必ず含んでおり、各発話機能は「中心」の前に位置するか後に位置するかによっても働きが異なると考えられる。そのため発話機能の出現比率を「中心」の前、「中心」の後に分けて分析することにした。各群におけるユニットの分布は図2の通りである。各群とも、「中心」は平均的に意見陳述全体の40%から60%の間に位

置していることがわかる。

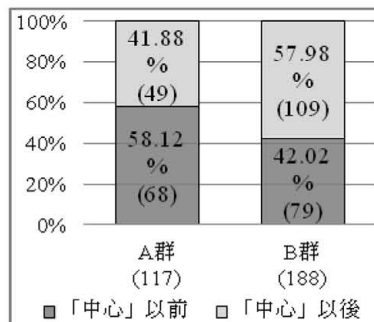


図2 「中心」を基準としたユニットの分布

各発話機能の出現比率を見てみると、A群では、「中心」以前では「状況説明」機能が54.41%、「中心」以後では「理由」機能が40.82%であり、最多であった(図3)。

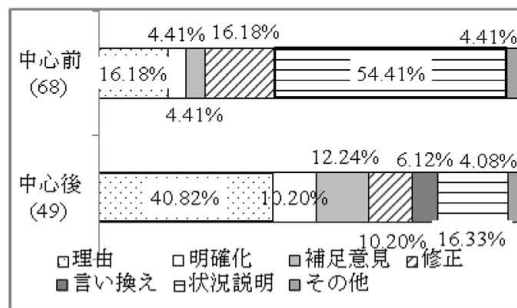


図3 A群による発話機能の出現比率

このことから、A群は主張を述べる前に主張の背景となる状況を説明する傾向、また、主張の後で理由づけを述べる傾向があることがわかる。

具体的にどのような意見陳述が展開されているか、発話例を用いて分析する。意見陳述例1は、少年犯罪が起こる原因についてA1が意見を述べている場面である。

<意見陳述例1(A1)> (:は音の引き伸ばし)

- 私も：なんか 家庭もあるけど： 補足意見
それだけじゃないみたいなの
- でも結構テレビとか見ると 必ず 状況説明
子供が何かやっちゃうと
なんか親はどんな職業をもってどんな
人なのかとか近所の 周辺にインタビュー
とったりして そういうのでも
すごい偏見を持たせるんですね

3 親がまともじゃない親なんだから： みたいな	状況説明
4 でもそういうのを見ると：なんか環境が 原因なんだというのもちょっと 変な気がしますね	中心
5 なんか似たようなちよつと まあ 幸せ じゃない環境で育った人でも ぜんぜん 普通にうまく：まじめにやっっていく人 も世の中に絶対いるから：	理由

ここでA1は、少年犯罪が起こるのは家庭環境に問題があるという考えに批判的な立場で主張を述べている。批判的な立場であることを示すため、まず家庭環境が原因だというのはメディアによって作られたものであるという事実を説明している(2、3)。そして主張を述べた後「幸せじゃない環境で育った人でも ぜんぜん普通にうまく まじめにやっっていく人も世の中に絶対いる」(5)と理由づけをしている。問題の背景を説明することで主張に客観性を持たせ、理由を後置することで主張を簡潔にまとめている様子がわかる。

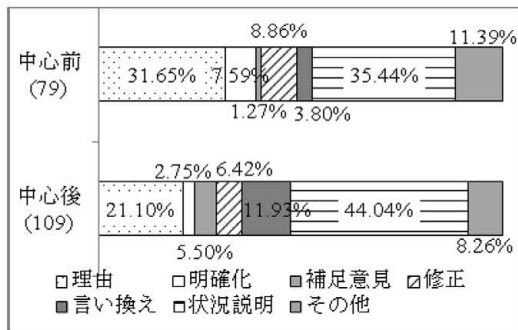


図4 B群による発話機能の出現比率

一方、B群では「中心」以前、「中心」以後共に「状況説明」機能の占める割合が高かった(図4)。「理由」機能は「中心」の前後共に一定比率表れており、前置および後置の特徴は表れていない。

ここから、B群では主張および理由を述べた後にも継続して状況の説明が行われる傾向があることがわかる。

意見陳述例2は、子どもの教育方法についてB12が意見を述べている場面である。

<意見陳述例2(B12)>

(h)は笑い、↑は文中上昇イントネーションを示す)

1 私ほんとに：小さいときから ストレ スほんとにたくさん たまって	状況説明
2 あの もしこれができなければ 両親 がこわるかも おこるかもしれない から 毎日毎日心配しました	状況説明
3 怒るかもしれないと はい	状況説明
4 私が子供うまったら 絶対そんなこと (h)しない(h)ので	理由
5 で韓国できょういきは あ韓国で 学校は あの私が生まれた子供には 韓国で学校とか えと 入学 さ されな い↑ あさせない：です	中心
6 日本でそだ 育てたいです	言い換え
7 でなんか教育がなんか違うので	状況説明
8 はい 韓国は あの：これが強いです	状況説明
9 子供が小学校中学校か高校か どっちの卒業したのに この人を 判断するので	状況説明
10 これほんとに強いです あの就職する ときも 大学に行くときも	状況説明
11 でこれが私がストレスになったので	状況説明
12 私の子供にはそんなことをさせたく ないです	言い換え

B12は韓国での教育方法に反対の意見を持っており、自分の子供時代の経験(1-3)を背景として説明した後、自分の子どもには韓国で学校に通わせたくないと言っている(5)。しかしそこで意見陳述は終わらず、韓国の状況をさらに説明した後(7-11)、主張を反復して述べている(12)。B群においては、ユニット7~11のような一般的な状況説明のほか、ユニット1~3のような個人の経験を語ることによる状況説明が多く用いられており、そのために結果的に状況説明機能が高頻度になっていると考えられる。

5.2.3 理由付けのない意見陳述

次に、3つのユニット以上で構成され「理由」機能を含まない意見陳述について分析した。「中心」機能を基準とした各群のユニット数は図5の通りである。A群では理由づけのある意見陳述の場合と同様、「中心」以前および以後に表れた発話機能数に偏りは見られない。しかしB群においては「中心」以前に75%を超える発話機能が用いられており、中心となる主張が意見陳述の終盤に用いられる傾向があることがわかる。

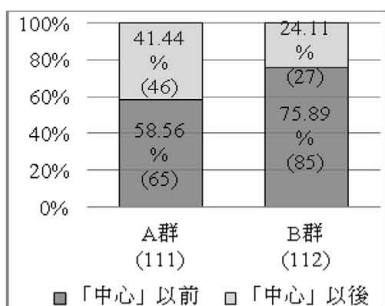


図5 「中心」を基準としたユニットの分布

各発話機能の出現比率は、A群では「中心」以前、「中心」以後共に「状況説明」機能が最も多い(図6)。しかし、次に多い発話機能に注目すると、「中心」以前では「修正」機能が、「中心」以後では「明確化」および「補足意見」機能の比率が高い。

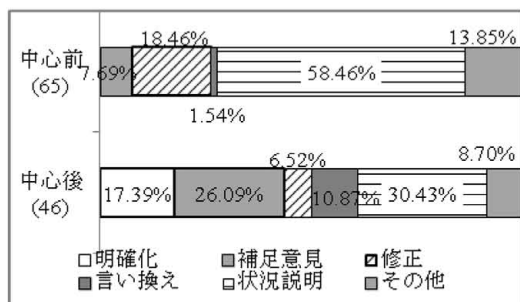


図6 A群による発話機能の出現比率

このことから、A群では主張の前後に関わらず問題の背景を説明する、主張を述べる前に但し書きをつける、主張を述べた後その内容を明確に示したり補強するという特徴があることがわかる。

意見陳述例3では、主張を修正したり明確化したりすることで意見陳述が的確に述べられる様子が観察された。これは、女子大の存在についてA13が肯定的な意見を述べている場面である。

<意見陳述例3(A13)>

(※は挿入句を挟んでユニットが続くことを示す)

- 1 私 悪いとは思ってないんですけど **修正**
- 2 女子大学があることには なんてあるんだらうとは思ってるんですけど **中心**
- 3 だからその 特別な目的とかがあるんじゃないかなければ ※ **明確化**
- 4 たとえばなんか なんていうんでしょう その 女性のそのリーダーシップすごくなにか育てるみたいな そういうの特別な目的じゃなければ **明確化**

- 5 たとえば女性がなんかうまく 特にうまくできる仕事に関してそういう分野を育てるとかじゃなければ **明確化**
 ※ 別に 別に女性 女子大学はいらないと思うんですけど

ここでA13は女子大の存在を疑問視しているという否定的意見を述べる前に「悪いとは思ってないんですけど」(1)と留保し、無条件に反対しているわけではないという立場を表している。そして「なんであるんだらうとは思ってる」(2)という曖昧な表現を「特別な目的とかがあるんじゃないかなければ別に 別に女性 女子大学はいらないと思うんですけど」(3)と内容が明確化するよう説明し直している。さらに(3)で述べた「特別な目的」について(4)(5)で具体的な例を挙げながら明確化している。「修正」および「明確化」機能を用いることで、主張をよりの確に表現しようとしている様子が伺える。

意見陳述例4では、主張が述べられた後さらにそれを補強する意見が追加される様子が観察された。これは、A3が多文化家庭の存在について肯定的な立場で話している場面である。

<意見陳述例4(A3)>

- 1 だからすごい あの： 違うものに対して排他的になったりとか 今までとは↑ そうしてきた↑ 社会が **状況説明**
- 2 その： なんか自分たちのものが取られてしまふとか： 壊されてしまふとか そういふ多分スタンスで↑ **状況説明**
- 3 戦争とかもそういうことだと 思うんですけど： **状況説明**
- 4 そうじゃなくて 違うものが入ってくることによって： さっきもおっしゃったように 自文化にも気づきがあるし またなんか 新たなものが↑こう 新たな形で： **中心**
- 5 それこそなんか いろんなところで なんか あの グローバル化グローバル化って 言ってるんですけども そんな なんだらう イメージが 独り歩きしてるみたいなどころありますよね **補足意見**
- 6 でもそういうことじゃなくて もうちょっと あの： 身近で人間的な部分↑ ていうものですよ **補足意見**

ここでA3は、多文化社会に否定的だった現在までの社会状況を述べ(1-3)、そのような見方をはっきり否定し「違うものが入ってくることによって：(中略)自文化に気づきがあるし」(4)と、多文化社会を肯定している。さらに、グローバル化という言葉が真に理解されていないという見解を示し(5)、身近なところ、つまり家庭からグローバル化は始められるという意見を付け加えている(6)。補足意見を加えることにより、社会の多文化化に賛成するという大きい視点での主張を、多文化家庭に賛成するという主張に絞り込んでいる。このように、A群では「補足意見」機能が主張を的確に表す役割を果たしていると言える。

一方、B群では、「中心」以前、以後とも「状況説明」機能が最多であるという点ではA群と変わらないものの、その他の発話機能には特別な傾向が見られなかった(図7)。また、A群に見られなかった機能として、話題と関連のない内容を話す「無関係」機能が見られた。

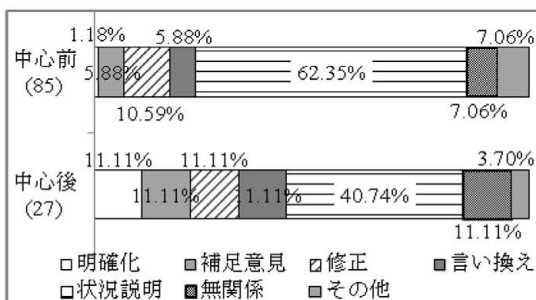


図7 B群による発話機能の出現比率

「中心」とそれを支えるべき発話機能との関係が薄いことから、理由づけのある意見陳述の場合と同様、B群では意見陳述にまとまりがないことが推測される。

6. 結果のまとめと考察

本研究では、NSとの意見交換場面においてNNSがどのような意見陳述を行っているか、構造面および機能面に注目して分析した。構造面では、A群は複雑な理由づけを含む主張を展開するという傾向はなく、意見陳述の長さが短い傾向があることが明らかになった。この結果は、発話レベルが上がるにつれ学習者は複段落を用い複雑な論理構造を持った意見陳述を多用するという先行研究の結果とは異なる。

これは、本研究のA群のNNSは、会話が行われ

る状況をよく把握し、その状況に合った発話を行おうとしていたためと考えられる。NNSが話し手、NSが聞き手となるインタビュー場面と違い、NSと対等な立場で意見交換を進めるという場面では、話し手と聞き手が頻りに交替しながら会話が進められる。そこでもし、複雑な論理展開を持つ意見陳述を多用すれば、1回の発言時間、すなわちターンの保持時間が長くなり、相手話者が聞き手に回らざるを得なくなる。A群のNNSはそのような状況を回避し、どちらが聞き手と固定せずに意見交換を円滑に進めるため、複雑で長い意見を多用せず、意見を簡潔に述べようとしていたのではないだろうか。

意見陳述の機能面では、構造パターン別の発話特徴が明らかになった。A群では、ユニット数2から成る簡潔な意見陳述では、主張のほかに「理由」および「修正」機能が多く用いられることがわかった。まとまった構造を持ち理由づけを含む意見陳述では、主張を述べる前に問題の背景説明をする、理由づけを主張に後置するという特徴が見られた。そして、まとまった構造を持ち理由づけを含まない意見陳述では、主張を一旦修正することにより厳密な意味にする、主張を述べた後その内容を明確化したり補強したりすることでの確に伝えているということがわかった。一方で、B群の意見陳述においては、個人の経験談を始めとする状況説明が多用されており、A群のように意見をまとめたり的確に表現しようとする特徴が見られなかった。

これらの結果から、A群のNNSは、短い発話機会の中で意見陳述を効率よくまとめようとしていることがわかる。ここで言う効率の良さとは、少ない伝達量の中でできるだけ効果的に自分の主張を伝えることのできる能力を指す。学習・使用歴が長く意見交換の経験値の高いNNSには、コンテキストに合わせて発話するスペースを考え、その中でできるだけ相手に負担なく伝わりやすい構成で話すという高度な能力が備わっていることが推察される。一方でB群のNNSはコンテキストを理解していない、あるいは理解していても自分の発話をコントロールする余裕は見られず、思いついたままの考えを自分の能力の限り話しているために意見陳述にまとまりがなく、冗長になっていると考えられる。

7. 今後の課題と日本語教育への示唆

本稿では、NSとのカジュアルな意見交換場面にお

いて、学習・使用歴および環境の違いによって NNS の意見陳述にどのような差異が見られるかを検討した。しかし、NS との意見交換を設定していながら、NNS 同士の比較を明確にするため、対話者としての NS の存在を極力小さく扱った。本稿では、NNS が一人で完結させた意見陳述のみを抽出して分析対象としたが、実際の相互行為においては、意見陳述自体を会話参加者双方で補いながら作り上げるという、共同発話による意見陳述も存在する。今後は、このような意見陳述が円滑な意見交換にどのように関わっているのか、という点にも注目して分析を進めたい。また、今回の分析結果が韓国語という母語の影響を受けての特徴なのかについては、さらに検証していく必要があるだろう。

冒頭で述べたように、意見述べに関する従来の研究には、話し手および聞き手の立場が固定されていることを前提としているものが多く、意見交換場面を想定したものは少なかった。NS との意見交換において、学習・使用歴が長く意見交換の経験値の高い NNS は会話相手と対等な立場で会話を作ること意識しながら、発話を短くまとめて話しているという本研究の結果は、新たな指導の視点として応用できると考える。まず全体として、自分の意見をできるだけ簡潔に述べることで会話相手の発話機会も増え、活発な意見交換に繋がるという効果を学習者に情報として伝えることができる。具体的な意見陳述の方法に重点を置いた指導としては、主張を明確化したり補足意見を加えること、理由を挙げながら論理を展開する際はその背景まで説明することなどで一層会話相手に伝わりやすくなることを示し、表現の練習をすることも可能だろう。以上のような指導を通して、会話は一人で行くのではなく会話相手と一緒に作っていくものだという意識を養うことができると考える。

注

1. OPI は Oral Proficiency Interview の略で、機能的にどのくらい話す能力があるかを総合的に評価するために開発されたインタビュー試験である。
2. 話し手が発話権を取って発話を始め、他の話者の発話やポーズで区切られて話すのをやめるまでをターン(一人の話者の話す順番)とする。あいづち的発話(杉戸 1989)はターンと見なさない。

参考文献

- 荻原稚佳子・斎藤眞理子・増田眞佐子・米田由喜代・伊藤とく美(2001)「上・超級日本語学習者における発話分析—発話内容領域との関わりから—」『世界の日本語教育』11, 83-102.
- 鎌田修(2005)「OPI の意義と異議」鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ(編)『言語教育の新展開：牧野成一教授古希記念論文集』第3章，ひつじ書房，311-332.
- 杉戸清樹(1987)「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち—談話行動における非言語的表現」『日本語教育』67, 48-59.
- 鈴木志のぶ(2004)「議論の多面的分析方法」鈴木健・矢野善郎・加藤貴之(編)『第二回議論学国際学会会議報告集』227-227.
- 鈴木志のぶ(2006)「日本語学習者によるアーギュメントの特徴 —上級者・超級者間の差異—」『Speech Communication Education』19, 95-112.
- バック・キャサリン(編)(1989)日本語 OPI 研究会(訳)『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』アルク
- 水谷信子(1985)『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- Lunsford, A. A. & Ruszkiewics, J. J. (2001). *Everything's an argument (2nd ed.)*, Boston, MA: Bedford/Martins's.
- Morrison, J. (1972). The absence of a rhetorical tradition in Japanese culture. *Western Speech*, 36, 89-102.
- Warnick, B. & Inch, E. S. (1989). *Critical thinking and communication* New York, Macmillan Publishing Company.

こまつ なな／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
nanako2007@gmail.com

稿末資料

発話機能名		定義	発話例(()内は「中心」を表す)
1. 中心		意見陳述での中心的な考えに相当する部分。	私は女子大より共学がいいと思います
2. 水平方向の継続	2.1. 明確化	「中心」「理由」「補足意見」について詳述したり説明を加えたりして、内容の明確化を図る。	(男子大学がないのは男性にとって不利です) ある意味男の人の視点から見ると、自分が入れる大学の数は減るわけじゃないですか
	2.2. 言い換え / 反復	あるユニットの内容とほぼ同じことを、言い方を変えて言ったり繰り返す。	(なんで女子大が残っているか私はわかりません) 共学にならないのはなんでだろうと思います
	2.3. 補足意見	「中心」に新たに意見を付け加えたり、「中心」に付随する意見を述べる。 ※全く違う内容の+ α (=追加)意見 (例 1)のほか、中心を補強する意見(例 2)も含む。	[例 1](男女の交流を育てるには共学がいいと思います) 女子だけだと考えが偏るんじゃないでしょうか [例 2] 元々私は、大学とは勉強する所だと思っています (今の大学は就職志向で良くないと思います)
	2.4. 状況説明	「中心」「理由」「補足意見」の内容を取り巻く状況の説明や前置きに相当する内容を述べる。	最近韓国って、子供の未来ばかり気にするんですよ (子供に勉強ばかりさせるのは良くないと思います)
	2.5. 修正	あるユニットの内容を一部修正したり、内容に制限を設けたり、但し書きのような役割をする。	もちろん成長する上で必要な部分もあると思いますが (子供に勉強だけさせるのは良くないと思います)
3. 垂直方向の支持	3-1. 理由	「中心」に理由付けをする。	女同士だと競争が激しくなっちゃうことがよくありますから(私は女子大より共学がいいと思います)
4. ユニット間無関連	4.1. 無関係	意味はとれるがどのユニットにも関連しない。	(私は女子大より共学がいいと思います) 私はずっと電車通学だったんです
	4.2. その他	会話維持の働きをする(例 1)。 言いかけなどの不完全なコメントにより、意味がとれない(例 2)。	[例 1] うーん、そうですね [例 2] だからそこで子供が

The Nature of Opinion Discourse of Non-native Speaker on Discussions: Focusing on History of Learning and Usage, Environment of Usage

KOMATSU Nana

Abstract

In this paper, an analysis of the characteristics of the responses of speakers, who have long history of learning and usage of Japanese and belong to the university or the graduate school, when expressing their opinions in discussions with native Japanese speakers was conducted with regard to speech structures and speech functions. With regard to speech structures, the results showed that, contrary to the findings of previous research, there wasn't a tendency to state lengthy opinions based on complicated cause and effect relationships but a tendency to express opinions concisely. With regard to speech functions, the results showed that, before stating their main assertions, they explain the background of the issue or other points necessary to accurately express their opinion. The results also showed that, after stating their main assertions, the subjects either clarified their assertions or provided supplementary explanations.

These results suggest that non-native speakers, who have long history of learning and usage and are in academic environment, have the ability to comprehend the context of discussions and create brief opportunities for speech to effectively express their opinions.

【Keywords】 discussion, history of learning and usage, statements of opinion, speech structure, speech function

(Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)